

「寅さんと日本人」を読んで

30数年前に「日本人とユダヤ人（著者：イザヤ・ペンダサナー後年、「山本七平」と判明）」の日本人論を読んだが、そのタイトルへの郷愁もあってか、「寅さんと日本人」を購読した。

この本は、社会心理学の側面から「日本人の心情と日本型人間関係の特性～映画『男はつらいよ』シリーズの分析を通して～」をテーマとする、2つの財団からの補助を受けた研究報告書でもあった。国際日本文化研究センターに関係する4人の学者が、日本人の殆どが見ているし圧倒的な人気現象から、「『男はつらいよ』を題材とする比較国民性論の展開」を意図し、各自が48作のシリーズを見ての研究報告である。

分かり易く云えば、なぜ「男はつらいよ」なのか、おいちゃん等と口喧嘩の最後に寅さんが云う「それをいっちゃあおしまいよ」とは何なのか、映画の最後のシーンに旅先から届く寅さんの葉書の「反省」とは何なのか、寅さんがおしゃべりでお節介なのはどこから出てきたのか、この映画シリーズが絵巻物として展開された理由、映画の果たす癒し機能、多彩なマドンナとの心理的な関わりの特徴、等々から、日本人論を考察したもののように私には思えた。

研究報告書だけに、作品一覧、マドンナ一覧、また、公にされている関係文献、等々の一覧もあり、引用・考察もされている。

かく云う私も寅さんファンで、48本のビデオセットを購入した程である（「雑学」バックナンバー随想等関係（I）P、2001.12.24。「寅さんシリーズ、映破！」：参照）。

ここで、この本に云う日本人論の内容にも触れたいが、映画を見ている時の楽しさが半減するかあと思ひ、内容の詳細紹介は差し控えたい。

ただ、私が当HPで、「心の居場所への観点を！」、「人間をジンカンと解する意識を！」、「結果でなくプロセスこそ大事」、「係わり合いの双方向性の視点を！」、等々、発信しているが、この本の日本人論からは、私は日本人の典型のよう。

でも、こうした「人間を相対主義的に理解する必要性は、文明間の対立を解消するためにも、今後おそらく広く世界に受け入れられるに違いない。」との記述に、なぜかほっとするし、また、勇気づけられる。

こうした視点から「寅さん」シリーズを見直してみたいという方は、一読をお勧めします。

（2005年9月14日 記）